ウィトゲンシュタインの『哲学的探究』を読む
——志向性に係わる部分（その２）——

黒　崎　　宏

以下は，ウィトゲンシュタインの『哲学的探究』の中で，特に「志向性」に係わると思われる部分の内から，特に「意志する」「意図する」「意味する」などに係わると思われる部分を，独断と偏見であるかも知れないという事を恐れずに，読み且つ解説したものである。私としてはそれなりに，一点の疑惑も残さずに，読み解きたいのである。徹底的に解読したいのである。そのかわり，冗長であると思われる所や強引であると思われる所も，あるであろう。おおかたの御批判を乞いたい。

611.「意志する事はまた単なる経験である。」と人は言うかも知れない。［しかし，そうではない。］（「意志はまた単なる表象である。」とも人は言うかも知れない。［しかし，やはりそうではない。］）意志は，それが生じるときに［当に］生じるのである。そして私は，意志を［意志によって］引き起こす事は出来ないのである。［意志は事象ではないから「引き起こし」の対象にはならないし，また，もし意志が意志によって引き起こされるとすれば，無限後退に陥るから。］

引き起こす事は出来ない？——何のように［引き起こす事は出来ないのか］？　［それに答える事はひとまず置いて，］それでは一体私は，何ならば引き起こす事が出来るのか？　私がこう言うとき，私は意志する事を何と比較しているのか？　［そこで，次の，「私の手の動き」が出て来る。］

612. 私の手の動きについて，例えば私は，それが生じるときに［当に］生じるのである，などとは言わないであろう。そしてここに，あるものが単に起こったのではなく，我々がそれをしたのだ，と言うことが有意

味である領域があるのである。「私は，私の手が上がるまで待つ必要はない。――私は，私の手を挙げることが出来るのである。」そして私はここにおいて，［今度は］私の手の動きを，例えば，私の心臓の激しい鼓動は静かになるであろう，という事に対置しているのである。

613. 私は（例えば，食べ過ぎによって腹痛を引き起こす事が出来るように，）或る事を一般に引き起こす事が出来る，という意味でならば，私はまた意志する事も引き起こす事が出来る。この意味で私は［例えば］，水に飛び込むことによって，泳ごうと意志する事を引き起こすのである。言うなれば，私はこう言いたいのである：私は意志する事を［この意味で引き起こすのではなく］意志するという事は出来ない；即ち，「意志する事を意志する事」について語ることは無意味なのである。[611で，「意志を引き起こす事は出来ない」と言うとき，それは，意志を意志によって引き起こす事は出来ない，という事なのである。]「意志する事」は，或る行為につけられた名前ではない。したがってまたそれは，自らの意志によって行なわれた行為につけられた名前でもない。そして［「意志する事を意志する事」という］私の誤った表現は，意志する事は［或る事を］或る直接的で非因果的な仕方で引き起こす事である，と考えようとする事に，由来するのである。しかしこの考えの底には，誤った類比が横たわっている。それは，因果的結合は，二つの部品を結合するメカニズムによって作り出されるように思われる，というものであり，そしてその結合は，そのメカニズムが狂わされると，破れるかも知れない，というものである。（[ここで] 人は唯，メカニズムが通常被る狂いのみを考え，例えば，歯車が突然柔らかくなるとか，互いに貫通し合うとか，等々，といった［途方もない］事は考えないのである。[もしその様な途方もない事まで考えれば，人はおそらく，意志する事は［或る事を］或る直接的で非因果的な仕方で引き起こす事である，などとも考えなくなるであろう。直接的であろうと非因果的であろうと，意志する事が事象として或る事を引き起こす，などとは考えなくなるであろうから，である。]）

614. 私が私の手を「意志的に」動かすとき，私は，この運動を引き起こすために，何らかの仲介手段を用いはしない。私の願いもまた，その様な仲介手段ではない。

615.「意志する事は，それが一種の願いであるべきではないならば，行為そのものでなくてはならない。[願いは，行為の前で立ち止まってもよいが,] 意志する事は，行為の前で立ち止まってはならない。」もし意志する事が行為であるならば，意志する事は，言葉の通常の意味で，行為なのである。したがって，意志する事は，語ること，書くこと，行くこと，何かを持ち上げること，何かを想像すること，である。しかしまたそれは，語ること，書くこと，[行くこと,] 何かを持ち上げること，何かを想像すること，等々，を，しようとすること，試みること，努力すること，でもあるのである。[613では，「意志する事」は或る行為につけられた名前ではない，と言われている。これが，ウィトゲンシュタインの本当の主張である。615で言われていることは，「それが一種の願いであるべきではないならば」とか「もし意志する事が行為であるならば」といった，仮定の上での話なのである。]

[ウィトゲンシュタインは『手稿』において言っている。「人は，為すこと無しには，意志する事は出来ない。意志行為は，行為の原因ではなく，行為自体である。」(4．11．16.) したがって，意志についてのウィトゲンシュタインの考えは，変わってきているわけである。]

616. 私が私の手を挙げるとき，私は，私の手が上がるであろう事を，願いはしなかった。意志的な行為は，この様な願いを締め出してしまうのである。[しかし] 人は勿論，次のように言うことは出来る：「私は，私がその円を完ぺきに描くであろう事を，望む。」そして人は，かく言う事によって，手はシカジカに動くであろう，という願いを表現しているのである。

617. 我々が自分の指を特別な仕方で組み合わせるとき，しばしば我々は，或る特定の指を動かすよう命令されても——命令者が [動かすべき] 指を [それに触る事なく] ただ眼に見えるように指示するだけの場合には——，その命令に従う事が出来ない。[その場合には一般に，例えば右手の中指を動かす様に命令されると，左手の中指が動いてしまうのである。] これに対し，命令者が [動かすべき] 指に触れるならば，我々はその指を動かす事が出来る。人はこの経験を，次のように記述したいかも知れない：我々は，[命令者が動かすべき指を，それに触る事なく，

ただ眼に見えるように指示するだけの場合には］その指を動かす事を意志する事が出来ない。［その場合には一般に，その指を動かす事を意志しようとしても，現実には，その指ではなく，別の指が動いてしまうのである。］この場合は，我々は，例えば誰かが［我々の］指をしっかり摑んでいるので，その指を動かす事が出来ないという場合と，全く異なっている。ここで人は，この前者の場合を次のように記述したいであろう：人は，動かすべき指に触れられない限り，意志に対して，それがどの指を動かそうとすべきかを見いだすことが出来ない；動かすべき指に触れられて初めて，意志はどの指を動かそうと意志すべきかを知り得るのである。――しかし，この［意志を主語にした］言い方は誤解を招き易い。人は，次の様に言いたいのであろう：「一体，如何にして私は，感覚が動かすべき指を示さない限り，何処に意志を向けるべきかを知るべきなのか？　［知り得ないのではないか？］」しかし，それでは一体，如何にして人は，感覚が動かすべき指の処にあるときには，どちらの方向に意志を向けるべきかを知るのか？　［感覚が動かすべき指の処にないときには，一般に左右を間違えるが，感覚が動かすべき指の処にあるときには，何故，左右を間違えないのか？］

この場合，我々が［動かすべき］指に触れられた事を感じるまでは，その指は言わば麻痺しているのだ，という事は，経験が示している事である。この事は，ア・プリオリに洞察され得る事ではなかったのである。

618. ここにおいて人は意志する主体を，質量の無い（慣性の無い）何かとして――即ち，自らの内に打ち勝つべき慣性抵抗を持っていない動因として――想像する。そしてそれ故［人は］，意志する主体は，動かす事だけをし，動かされる事が無いものなのである［，と想像する］。即ち，人は次の様に言うことが出来る：「私は意志する。しかし私の身体は私［の意志］に従わない。」――しかし，人は次の様には言うことが出来ない：「私の意志は私に従わない。」（アウグスチヌス）

しかし，私には意志する事が成功しない事などあり得ない，という意味で，私には意志する事を試みる事などあり得ないのである。

619. そして，人は次の様に言うかも知れない：「私は，意志する事を決して試みることが出来ない限りにおいてのみ，いつでも意志する事

が出来るのである。」

620. 為すことそれ自体は，経験［世界］においては，延長を持っていないように思われる。それは，針の先端のような，大きさの無い点のように思われる。この先端が，本当の起動者であると思われる。そして現象における出来事は，この為すことの結果に過ぎないのである［と思われる］。「私は為す」という事は，全ての経験とは別に，或る一定の意味を持っているように，思われるのである。

621. しかし我々は，或る一つの事を忘れない様にしよう。それは，「私が私の手を挙げる」とき，私の手が上がる，という事である。そして，問題はこうである：私が私の手を挙げるという事実から，私の手が上がるという事実を差し引くとき，残るものは何か？　［事実としては，何も残らない。］
((さて，運動感覚が私の意志であるのか？　［勿論，そうではない。]))

622. 私が私の手を挙げるとき，大抵私は，私の手を挙げようと試みはしない。

623.「私は，是非ともこの家にたどり着きたいと，意志している。」しかし，そこには何等の困難もないならば，――それでも，是非ともこの家にたどり着こうと試みる事が出来るであろうか？　［出来はしない。］

624. 実験室で，例えば電流を流された状態で，ある人が眼を閉じて――［実は］手は動いていないにもかかわらず――「私は私の手を上下に動かしている。」と言う［としよう］。［この場合］我々は「そうであるとすれば，彼はこの［上下］運動の特別な感じを持っているのだ。」と言う。――眼を閉じて，君の手をあちこちに動かしなさい。そして今度は，君がそうしている間，手は静止しており，君はただ筋肉と関節に或る奇妙な感覚を持っているだけだ，と自分に言い聞かせなさい！

625.「如何にして君は，君は君の手を挙げたという事を，知っている

のか？」――「私は，私は私の手を挙げたという事を，感じている。」そうであるとすれば，君が認知しているものは，感覚であろうか。そして君は，君はその感覚を正しく認知しているという事に，確信があるのか？――君は，君は君の手を挙げたという事に，確信がある。[そうであるとすれば] この事が，君はその感覚を正しく認知しているという事の規準，ものさし，ではないのか？　[行為の感覚に対する優先]

626.「私が棒でこの物を探るとき，私は，その棒を持っている手にではなく，その棒の先に感触を持つ。」或る人が「私は，手にではなく，手首に痛みを持っている。」と言えば，医者はその手首を調べる事になる。しかし私が，私はその物の堅さを棒の先に感じる，と言うか，手に感じる，と言うかで，どんな違いが生じるのか？　「私が棒でこの物を探るとき，私は，その棒を持っている手にではなく，その棒の先に感触を持つ」という事は，「私の神経は棒の先まで延びているかの如くである」という事を意味しているのか？　[そうであるとすれば] 如何なる意味でそうなのか？――さて，私はとにかく「私は堅さ，等々，を棒の先に感じる。」と言いたい。そして私は，かく言うことで，次の様なことを意味しているのである：私は物を探るとき，私の手ではなく，棒の先を見る；私は，私が感じる事を「私はそこに堅くて丸い何かを感じる。」と言って記述し，――「私は，親指，中指，人差指，……の先に圧力を感じる。」などとは言わない。例えば誰かが私に「君は今，探り棒を持っている指に何を感じているか？」と問えば，私は彼に次の様に答えるであろう：「私は知らない。――私はそこ [の物] に堅くてザラザラした何かを感じているのである。」

627. 意志的な行為についての次のような記述について，考察せよ。「私は，5時に鐘をつこうと決心する。そして，5時の時報が鳴ると，私の手は鐘をつく運動をするのである。」――これは，[意志的な行為についての] 正しい記述であろうか。そして，「私は，5時に鐘をつこうと決心する。そして，5時の時報が鳴ると，私は私の手を挙げるのである。」という記述は，正しい記述ではないのであろうか。第一の記述については，人は次のような補足をする事が出来る。「そして，見よ！　5時の時報が鳴ると，私の手は上がるではないか？」そして，この「見よ！」

という事は，まさにここにおいては，あってはならない事なのである。私が手を挙げるとき，私は「見よ，私の手が上がる。」とは言いはしないのである。

628. かくして人は，次のように言う事が出来よう：意志的な動きに特徴的な事は，そこには驚きが存在しない，という事である。そして私には，人は「しからば，何故そこには驚きが存在しないのか。」と問うとは，思われない。

629. 人々が未来についての予知の可能性について語るとき，彼らは常に，意志的な動きについて［我々が］予言をするという事実を，忘れている。

630. 次のような二つの言語ゲームについて，考察せよ。

(a)或る人が或る他の人に，或る特定の手の動運をするように，或るいは，或る特定の姿勢をとるように，命令する。（［例えば，］体操の教師とその生徒［の場合］）そして，この言語ゲームの一変種として，次のようなものがある：生徒が，自らに命令し，そして，それを実行する。［しかし，ここでの主題は，生徒が自らに命令するという事，である。］

(b)或る人が，或る規則的な現象を――例えば，種々の金属の酸に対する反応を――観察し，そしてそれに基づいて，或る特定の場合には生じるであろう反応について，予測する。

これら二つの言語ゲームの間には，明らかな親近性と共に，根本的な相違がある。両者において，人は［未来について］語られた言葉［――(a)の場合には，命令された運動や姿勢について語られた言葉であり，(b)の場合には，予測された現象について語られた言葉――］を「予言」と呼ぶ事が出来よう。しかし，第一の技術［(命令の技術)］の獲得を目指す訓練と，第二の技術［(予測の技術)］の獲得を目指す訓練を，比較せよ！

631.「私は，今，二つの散薬をのむであろう；そして私は，三十分後に，吐くであろう。」私が，第一の場合には，私は行為者であり，第二の場合には，私は単なる観察者である，と言っても，何の説明にもならない。［何故，何の説明にもならないのか，私には不明である。私には，

よい説明のように思われる。］或るいは，私は因果的結合を，第一の場合には内側から見，第二の場合には外側から見ているのだ，と言っても，何の説明にもならない。［因果的結合を内側から見る，という事はあり得ない。］そしてまた，それらと似た多くの事を言っても，何の説明にもならないのである。

第一の種類の予言は，第二の種類の予言と同様に，確実ではない，と言うとしても，核心を突いてはいない。

私は，私の振舞についての観察に基づいて，「私は，今，二つの散薬をのむであろう。」と言ったのではない。この命題の前件は，［私の振舞についての観察とは］別であった。私が［この命題の前件として］思っていることは，［私を］この命題に導く思念，行為，等々，である。そして［君が］，「君のこの命題の唯一本質的な前件は，まさに君の決心である。」と言うとしても，それは，ただ誤解に導くだけである。

632. 私は，「私は散薬をのむであろう。」という意志の表出の場合，この［「私は散薬をのむであろう。」という］予言が原因であり――そして，その充足が結果である，と言おうとは思わない。（この事は，おそらく生理学的研究によって，決着がつけられるであろう［が］。）しかし，それよりも遙かに真実なのは，しばしば我々は或る人の決心の表出からその人の行為を予言する事が出来る，という事である。この事は，重要な言語ゲームである。

633.「君は以前に［話を］中断させられましたね。それでも［今］なお君は，［その時］君が言おうとした事を，知っていますか？」――もし私が，その時私が言おうとした事を，今知っており，そしてそれを言えば――この事は，私はそれを既にその時考えていたのであり，唯言わなかっただけである，という事なのか？　そうではない。但し，私が中断させられた話の先を確実に続けるとき，君がその確実性を，［私には］その時既にその考えがあったのだ、という事の規準として執るのであるならば，別であるが。――しかし，その状況と私の思考の中には，その話の先を続けるのを助けるかもしれない全てのものが，確かに既に存在するのである。

634. 私が，中断させられた話の先を続け，そして，その時私はその話をそのように続けようと思っていたのだ，と言えば，この事は，私が簡単なメモに基づいて或る思考過程を遂行するときと，似ている。

この［私が中断させられた話の先を続ける］場合，私は，メモを解釈しているのではないのか？　［そして］そのような状況では，唯一つの続け方のみが可能なのだろうか？　確かに，そうではない。しかし私は，複数の解釈の間で選択をしはしない。私は，私はそう言おうとしていたのだ，という事を［まさに］思い出したのである。

635.「私は……と言おうとしていた。」――［かく言うとき］君は，様々な個々の事物を思い出している。しかし，それらの個々の事物が全体で「私は……と言おうとしていた」という事を示しているわけではない。君が，様々な個々の事物を思い出しているとき，それは，あたかも，或る光景の［スナップ写真の様な］像が得られたようなもの，なのである。しかし，そこには，幾つかの片々たる個々の事物が見られるだけなのである。ここには手があり，あそこには顔の一部，或るいは帽子があり，――そして，それ以外の部分は暗黒なのである。しかし今や私は，あたかも，その像全体が表現している事を完全に知っているかの如く，なのである。私は，その暗黒な部分を読むことが出来るかの如く，なのである。

636.［「私は……と言おうとしていた。」と言うとき，］それらの「個々の事物」は，私が同様に思い出すことが出来る他の状況は無関係である，という意味では，無関係ではない。しかし，私が或る人に「私はその時……と言おうとしていた。」と言うとき，その人はそれによって［私が思い出す］それらの個々の事物を，経験するわけではないし，また，推測する必要もない。［そのうえ］例えば彼は，私は既に話し出すために口を開きかけていた，という事を知らなくてはならないのではない。しかし彼は，「私は……と言おうとしていた」という事象を，私は既に話し出すために口を開きかけていた，という様に「心に描く」事は可能なのである。（そしてこの能力は，彼が私が彼に言ったことを理解する能力の，一部なのである。）

637.「私は，［今］私が言おうとしていた事を，正確に知っている！」

しかしそれでも私は，それを言わなかったのだ。——そして私は，それを，[それとは] 別の，その時生じており，私が思い出しているところの，何らかの事象から，読み取っているのでもない。

そして私は，その時の状況やそれ以前の状況を，解釈するのでもない。何故なら，私はそれらについて，考慮も判断もしないのであるから。

638. それにも拘らず，私が「私は一瞬の間彼を騙そうと思った。」と言う時，私はそこに解釈を見る傾向がある，という事は，どうして生じるのか？

「如何にして君は，君は一瞬の間彼を騙そうと思った，という事に確信があり得るのか？ [それは一瞬の間の事であるから,] 君の行為と思考は [まだ] 余りにも未発達 [の状態で終わってしまったの] ではないのか？」

それでは，その証拠は非常に乏しい，という事があり得ないのか？ あり得る。[この場合,] 人が証拠を追ってゆけば，証拠は極めて少ない，と思われるのである。しかしこの事は，人はこの証拠の歴史 [(時間経過)] を考慮しないから，ではない。[たとえ考慮しても，一瞬の間の事であるから，証拠は極めて少ない，と思われるのである。] 私が，他人に気分が悪いと嘘を言う意図を，一瞬の間持った時，そのためには [，その時の時間経過ではなく,] 或る前史が必要なのである。

「一瞬……」と言う人は，実際に唯一瞬の間の事象だけを記述しているのであろうか？ [そうではない。]

しかしまた，全歴史が，私が「一瞬……」と言うときに基づく証拠であるわけでもない。

639. 意図は [突然] 発生するものだ、と人は言うかも知れない。しかし，そのように言うことの内にも，誤りが存在する。

640.「この考えは，私がかつて一度持った事のある考えを引き継いでいる。」—— [しからば,] 如何にしてこの考えは，その引き継ぎをしているのか？ 引き継ぎの感覚によってか？ しかし，如何にしてこの感覚は，それら二つの考えを，実際に結合し得るのか？——「感覚」という語は，ここでは，非常に誤解を招き易い。しかし，「この考えは，あ

の以前の考えと結合している。」と確実性を持って言うことは，その結合を示すことが可能ではないとしても，多くの場合に可能である。その結合を示すことは，おそらく，後になって出来るのである。[規準が未来にある，という場合の一例である。]

641.「私が「私は今彼を欺こうと思う。」と言ったとき，私はその意図を，そのように言うことよりももっと確かに，持っていたのではないであろう。」——しかし，もし君が「私は今彼を欺こうと思う。」と言ったとすれば，君はその言葉を全く真剣に考えたのでなくてはならないのではないか？　（したがって，意図の最も明示的な表現だけでは，意図の十分な証拠ではないのである。[それに加えて，真剣さが必要である，というわけである。]）

642. [君が]「私は彼をその瞬間に憎んだ。」[と言う。]——[君が彼を憎んだ] その時，[君に] 何が起こったのか？　その時 [君に] 起こった事は，[君の] 思いと感情と行為によって成り立っているのではないのか？　そして，もし私がその瞬間を今自分で実演するならば，私は特定の顔をし，或る出来事を考え，一定の仕方で息をし，そして私の内に，或る感情を生み出すであろう。[その上] 私は，その憎しみを燃え上がらせた言葉のやりとり，といった場面全体を，考え出すことが出来よう。そして私はこの場面を，実際の出来事の時に [君が] 持った感情とほぼ等しい感情を持って，演じることが出来よう。その際私にとって，私が [その場面と] 似た場面を実際に体験したという事が，助けになるのは勿論である。

643. もし私が今 [，彼をその瞬間に憎んだ，という] 不意の出来事で恥ずかしく思うならば，私は，[私の] 言葉，トゲのある話し方，等々，といった全体の事で，恥ずかしく思うのである。

644.「私は，私がその時にした事で，恥ずかしく思うのではなく，私が持っていた意図で，恥ずかしく思うのである。」——しかし，意図は私がした事の中にも在るのではないのか？　恥ずかしく思う，という事を正当化するのは何か？　[それは，] 不意の出来事の歴史全体である。

645.「一瞬の間私は……をしようと思った。」但し私は，[「意志」の内的体験ではなく,] 特定の感情という内的体験を持ったのである；そして私は，その内的体験について思い出すのである。——それでは今，[その内的体験について] 全く正しく思い出せ！　すると，意志の「内的体験」はやはり消えてしまっているように思われる。そのかわり人は，思い，感情，運動，そしてまた，以前の状況との関連をも，思い出すのである。

それは丁度，人が顕微鏡の調節をしたので，以前は見えなかったものが，今は焦点が合ったので見える，というようなものである。

646.「さてこの事は，君は顕微鏡を間違って調節したのだ，という事を示しているだけである。君は標本の或る特定の層を見なくてはならないのに，今や君はそれとは別の層を見ているのである。」

かく言われるとき，そこには幾らか正しい部分がある。しかし，私が（レンズの特定の調節によって）或る感覚について思いだした，としよう；このとき，如何にして私は，その感覚は私が「意図」と呼ぶものである，と言うことが出来るか？（例えば）或る特定のムズムズする感覚が如何なる私の意図にも随伴している，という事も有り得るのではないのか？

647.［しからば,］意図の自然な表現とは何か？——鳥に忍び寄る時の猫を見よ；或るいは，逃げようとしている時の動物を見よ。

((感覚に関する命題との結合))

648.「もはや私は，私が言った言葉を憶えていない。しかし私は，私の意図を正確に憶えている：私は，彼を私の言葉で落ち着かせようとしていたのである。」私の記憶は，何を示しているのか？；私の記憶は，私の心に何を浮かばせるのか？　さて［今度は］，私の記憶が，私が言った言葉と，そしておそらく，その他の——状況をなお一層詳しく描く——言葉を，私に思い浮かばせる以外に，何もしなかったとしたら［，どうであろう］！——（「私はもはや私の言葉を憶えていない。しかし私は，私の言葉の精神はよく憶えている。」［と言いたくなる。］）

649.「それでは，言語を全く習わなかった人は，ある種の記憶を持ち

得ないのか？」勿論［，持ち得ない］。――そのような人は，言語において成り立つ記憶，言語において成り立つ望みや恐れ，等々，を持つことが出来ない。そして，言語において成り立つ記憶，等々は，本来の意味での体験の，ただ単に古びた表現ではないのである；それでは，言語的なものは体験ではない，というのか？［その通りである。］

650. 我々は，犬は主人に打たれるであろう事を恐れる，と言う；しかし我々は，犬は主人に明日打たれるであろう事を恐れる，とは言わない。何故，言わないのか？［犬には「明日」という言語がないから，である。］

651.「私は，私はその時もっと長く滞在したいと望んでいた，という事を思い出した。」――それでは，この願望のどんな像が心に浮かんだのか？　全く何も浮かびはしなかった。［そしてまた，］思い出の中で私の心に浮かんだ何ものも，私の［，もっと長く滞在したい，という］感情を推論させはしないのである。しかもなお私は，全く明確に，そのような感情があったことを，思い出すのである。

652.「彼は，敵意のある眼差しで或る人をジロジロ眺め，そして，言った。……」この物語の読者は，これを理解する。この物語の読者は，［この物語に関し，］自分の心に一片の疑念も持っていない。さて，［ここで］君は次のように言う：「よろしい。この物語の読者は［この物語の］意味を，考え出して付与しているのである，推測しているのである。」――［しかし］一般的には，そうではない。一般的には，この物語の読者は，何ものも考え出したり付与したりしてはいない，何ものも推測してはいない。――しかし，敵意のある眼差しと言葉が，後に見せかけである事が分かるという事，或るいは，敵意のある眼差しと言葉が見せかけであるか否かについて，この物語の読者が疑念を抱くという事，そしてまた，したがって，この物語の読者が実際に或る可能な解釈を推測するという事，これらの事も可能である。――しかしその時は，この物語の読者は，何にも増して，コンテクストを推測するのである。［そして］この物語の読者は，例えば，それ程までに敵対関係にある彼らは，実は，［仲の良い］友達なのである，等々，と言うのである。

((「「彼は，敵意のある眼差しで或る人をジロジロ眺め，そして，言った。……」という命題を理解しようと思うならば，その上君は心的意味，［即ち］心の状態，を［君の］心に描かなくてはならない。」［と言われるかも知れない。しかし勿論，そんな事はない。］))

653. 次の様な場合を考えよ：私は或る人に，私は予め作り上げられていた地図に従って或る道を行った，と言う。その上，私は彼にその地図を示すのである。その地図は，紙の上に書かれた幾本かの線によって，構成されている；しかし私は，如何にしてこれらの線が私が歩く道の地図であるのかという事を，説明できず，また他人に，如何にこの地図は解釈されねばならないのか，という事に関する［解釈］規則を語ることも出来ないのである。しかし確かに私は，その地図に，地図を読む事に特徴的なあらゆる徴候を持って，従ったのである。私は，その様な地図を「私的」地図と呼ぶ事が出来よう。或るいは，私が記述してきた現象を「私的地図に従う」と呼ぶ事が出来よう。（しかし，この表現は勿論非常に誤解を招き易いであろう。）

さて私は，次のように言うことが出来るであろうか：「その時私はシカジカに行為したいと思っていた，という事を，言わば私は――地図は眼の前にないとしても――地図から読み取るように，読み取るのである。」？　しかし，かく言う事は，次のように言う事以外の何ものでもない：「私は，シカジカに行為しようとした意図を，私が思い出す或る心の状態の中に読み取るのである。」そして今や私には，そのように言う傾向があるのである。

654. 我々の誤りは，我々が事実を「原現象」として見なくてはならない所で，即ち，我々が，かかる言語ゲームが行なわれている，と言うべき所で，説明を求めるという事である。

655. 問題は，言語ゲームを我々の体験によって説明する事ではなく，言語ゲームを確認する事である。

656. 何のために私はある人に，私は以前にシカジカの望みを持っていた，と言うのか？――言語ゲームを，原初的なものとして，見よ。そ

して，感情，等々，を，言語ゲームについての見方——解釈——として，見よ！［感情は，言語ゲームには属していない。感情は，言語ゲームに参加する当人に生ずるものなのである，として見よ，というのである。］

人は，次の様に問うかもしれない：如何にして人は，我々が「過去の望みを報告すること」或るいは「過去の意図を報告すること」と呼ぶ言語的表出を，するようになったのか？

657. この表出は常に「私は自らに「もし私がもっと長く［ここに］留まっていられさえしたら！」と言った」という形式を取っている，と考えよ。この様な報告の目的は，他人に私の［，もし私がもっと長く［ここに］留まっていられさえしたら，という］反応を知らせる，という事であり得る。（「思う」（'meinen'）と「言おうと思う」（'vouloir dire'）の文法を比較せよ。）

658. 我々は，人間の意図を常に「彼は言わば自らに「私は……をしようと思う」と言った。」と言う事によって表現した，と考えよ。これは［好ましくない］像である。そして今や私は，「ある事を言わば自らに語る」という表現を如何に使うのか，という事を知ろうと欲するであろうか？［欲しはしない。］何故なら，その表現は，［事実上は］ある事を自らに語る，という事を意味していないから。［意図は，「自らに語る」必要なしに，自ずから分かっているのである。］

659. 何故私は彼に，私がした事の他に，なお［私の］意図をも伝えようとするのか？——それは，意図は［私がした事の他に］なおその時起こっていた何か或る事であったから，ではない。それは，私は彼に私についての或る事——その時起こっていた事を越え出ている或る事——を伝えようとするから，なのである。

私が彼に，私がしようと思っていた事を言えば，私は彼に，私の内面を打ち明けているのである。——しかしそれは，自己観察に基づいて，ではない。それは，或る反応（人はそれを「直観」と呼ぶことも出来よう。）によって，なのである。

660.「私はその時……と言おうと思っていた」という表現の文法は，

「私はその時，先を続ける事が出来た」という表現の文法と，関係がある。
一方は，意図の記憶［が問題なの］であり，他方は，理解の記憶［が問題なの］である。

661. 私は，［その時私は］彼を意味していた，という事を覚えている。［しからば］私は，［私における］或る過程あるいは状態を覚えているのか？［そうではない。］――［もしそうであるならば，］その過程あるいは状態は，何時始まったのか；如何に経過したのか；等々［，という事が問われ得る。しかし，この様な問には答えは存在しない］。

662. ［661における「意味する」の場面とは］ほんの少し異なった状況において，私［(但し，原文では彼。しかし，前後関係からすれば，彼ではなく私であろう。)］が，黙って手招きする代わりに，或る人に「Nに，私の所に来るように言え。」と言ったとしよう。この場合人は，私が「私は，Nが私の所に来る事を欲していた。」と言えば，それは私の心のその時の状態を記述している，と言うことが出来る。［欲する，という事には純粋な持続が有り得る。しかし，意味する，という事には純粋な持続は有り得ない。］しかしまた人は，その様なことを言わないことも出来る。

663. 私が「［その時私は］彼を意味していた。」と言うとき，おそらく私には或る像が，例えば，私に見える彼の様子，等々，についての像が，浮かぶであろう。しかしその像は，或る話の挿絵の様なものに過ぎないのである。その挿絵だけからでは，大抵の場合，如何なる帰結も導かれないであろう。人は，その話を知って初めて，その像の意義を知るのである。

664. 語の使用において，人は「表層文法」を「深層文法」から区別することが出来よう。語の使用において，直接我々に印象づけられるものは，文章構成における語の使われ方である。それは，語の使用の一部分であり，耳で聞いて分かる部分である――と言えよう。――さて，例えば「意味する」という語の深層文法を，その表層文法が我々に推測させる所のものと，比較せよ。人が，ここにおける事態が如何なるもので

あるかに精通することに，困難を見いだすとしても，驚くに当たらない。[ウィトゲンシュタインにおける「表層文法」と「深層文法」の区別は，チョムスキーにおけるそれとは全く別である。実は，『哲学的探究』の全体が，様々な語の深層文法の解明に他ならないのである。]

665. 或る人が，痛みの表情をして，彼自身の頬を指さし「アブラカダブラ！」と言った，と考えよ。――［ここで］我々は問う。「君は［「アブラカダブラ」でもって］何を意味しているのか？」そして，君は答える。「私は，それでもって，歯痛を意味していたのだ。」――君は直ちに自問する：それでは，如何にして人は「アブラカダブラ」という語でもって，「歯痛を意味する」事が出来るのか？　或るいは，それでは，「アブラカダブラ」という語でもって歯痛を意味するという事は，どういう事だったのか？　にもかかわらず君は，他の文脈では，コレコレの事を意味する，という精神活動は，言語使用においては，まさに最重要な事である，と主張したことであろう。

しからば，如何にして［その様な主張が出来るのか］？――それでは，私は「私は「アブラカダブラ」という語でもって［，歯痛を意味する精神活動ではなく，まさに］歯痛を意味する」と言えないのか？　勿論，言える。しかし，「私は「アブラカダブラ」という語でもって歯痛を意味する」という事は，定義であり，「アブラカダブラ」という語を発したときに私の中に生じた事についての記述ではない。[歯痛を意味する，という精神活動は，言語使用においては，全く重要ではないのである。]

666. 君は痛みを持っており，そして同時に，隣室で如何にピアノが調律されているかが聞こえて来る，としよう。君は言う。「それは間もなく止むでしょう。」しかし［かく言うとき］君は［，「それ」でもって］痛みを意味しているのか，それとも，ピアノの調律の音を意味しているのか？　それらは，全く違うことである。――勿論［その通りである］。しからば，その違いは何処にあるのか。私は，以下の事を認める：多くの場合，何かを意味することには，注意の方向が対応するであろう。しばしば，何かを意味することには，眼差し，身振り，或るいは――人が「内面を見つめる」と名づけ得るような――瞑目なども対応するであろう様に，である。[意味することの違いを，「何処にあるのか（worin

besteht)」として，何らかの出来事に求めると，答えは出てこない。この違いは言語ゲーム全体において見られなくてはならないであろう。678を見よ。]

667. 或る人が痛みはないのに痛みの振舞をして，「それは間もなく和らぐでしょう。」と言う，としよう。[このとき] 人は，彼は [「それ」でもって，間もなく和らぐ，と言われる] その痛みを意味しているのだ，と言えないであろうか？　「勿論，言える。「それは間もなく和らぐでしょう。」と言うことは，嘘ではあるが，無意味ではないから。] とはいえ彼は，彼の注意を痛みに集中しはしない。[そもそも痛みは存在しないのである。したがって，「それ」でもってその痛みを意味するために，その痛みに注意を集中することは不可欠ではない。] ——そして，もし彼 [原文では，「私」である。しかし，ここは「彼」であろう。] が最後に「痛みは既に止んだ。」と言えば，どうであろう。[彼の嘘は，彼の告白以外には，他人には知られないことになる。]

668. しからば，人は次のような嘘をつくことも出来ないであろうか？　人が「それは間もなく止むであろう。」と言い，そして [「それ」でもって] 痛みを意味する，——しかし「君は [「それ」でもって] 何を意味しているのか？」と問われて，「隣室の騒音である。」と答える。この種の場合には，人は例えば次のように言う。「私は……と答えようとしていた。しかし私は，よく考えたあげく，[それとは違って] ……と答えてしまった。」

669. 人は，語る際，指示することに依って，或る対象に言及する事が出来る。この指示は，ここでは，その言語ゲームの一部分である。さて我々には，感覚について語る際，あたかも人は彼の注意をその感覚に向けることに依って語るかの如くに，思われる。しからば，この類比は何処にあるのか？　明らかにこの類比は，人は見る事と聴く事に依ってあるものを指示することが出来る，という事にあるのである。

しかしまた，人がそれについて語っている対象を指示するという事は，言語ゲームにとって，[そしてまた] 思考にとって，場合に依っては全く本質的ではない事があり得るのである。

670. 君が或る人に電話をし，そして彼に，或る机を指示しながら「この机は高さが高すぎる。」と言う，とせよ。この場合，この指示は如何なる役目を果たすのか？［彼に対しては，何の役目も果たしはしない。しからば，君自身に対してはどうか？］君［原文では，「私」である。しかし，ここは「君」とした方がよいであろう。］は，問題の机を指示し，「私は［「この机」でもって］今私が指示したこの机を意味している。」と言うことが出来るのか？［勿論，言おうと思えば，言うことが出来る。しかし，今の場面がそうであるように，そこに君自身しかいないときには，その様に言うことには何の意味もない。一体，］この指示は何の為なのか？　そして，「私は［「この机」でもって］今私が指示したこの机を意味している。」と言う事は何の為なのか？［その様な事は，君自身にとっては，既に了解済みの事ではないのか？］そしてまた，そう言う事以外に何が言えるのか？［何も言えない。］

671. そしてそれなら私は，聴き耳を立てるという内的活動に依って，何を指示するのか？　私の耳に届いた音を，であろうか？　そしてまた，私に何も聞こえないとすれば，静寂を，であろうか？

聴き耳を立てるという事は，いわば，聴覚印象を探すという事である。そしてそれ故，聴き耳を立てるという事は，聴覚印象を指示する事は出来ない。それはただ，そこで聴覚印象を探すところの，場所を指示するだけである。［聴覚印象は日常世界の中に，即ち外部に，あるという事に，注意せよ。聴き耳を立てるという内的活動は，ただ，そこで聴覚印象を探すところの，外部世界の或る場所を指示するだけなのである。］

672. もし，［「聴き耳を立てる」という事で例示されるような］受け身の態度は，或るものについての「指示」である，と言われるならば，——それは，それに依って我々が得る感覚への指示ではない。

673. 語に精神的態度が「随伴する」としても，それは，語に身振りが随伴するのと同じ意味において，ではない。（それは丁度，人は独りで旅をすることが出来るが，しかしその旅には，それは私が望んだものである，という事が随伴している，という様なものである。そしてまた，それは丁度，空間は空っぽであり得るが，しかしそれには光が満ちている，という様なものである。）

[ここで言う「精神的態度」については，次の674を見よ。また，語に身振りが随伴するとき，その身振りは「規準」である。]

674. 人は例えば「私は今本当は私の痛みを意味してはいなかった。[何故なら,] 私は [今] 十分に私の痛みに注意していなかった [から]。」[など] と言うであろうか？ [言いはしない。] [また] 私は，例えば，次のように自問するであろうか：「一体私は今この語で何を意味していたのか？　私の注意は私の痛みと [隣室の] 騒音に分けられていたのだ。——」？ [自問はしない。] [なお，666と668を参照の事。] [また，「私は [今] 十分に私の痛みに注意していなかった」とか「私の注意は私の痛みと [隣室の] 騒音に分けられていた」などは，673における「精神的態度」の例である。]

675.「君が……という言葉を発したとき，君の内に何が生じたかを言ってくれないか？」——これに対する答えは,「私は……を意味していた」ではない。[意味するという事は，出来事ではない。]

676.「私はこの語でこれを意味していた。」は，一つの情報である。[しかし] それは，心の動きについての情報とは異なって用いられる。[意味する事は，心の動きと別である。]

677. 他方,「君が先ほど罵倒の言葉を発したとき，君は実際に [その罵倒の言葉で] 罵倒を意味していたのか？」[と言われるとき,] これは例えば,「君はその時実際に怒っていたのか？」という事と同じである。——そして [それに対する] 答えは，反省に基づいて与えられるであろう。そしてそれは，しばしば,「私は [その罵倒の言葉で] 罵倒を非常に真剣に意味してはいなかった。」とか,「私は [その罵倒の言葉で] 罵倒を半分冗談で意味していた。」等々，といった種類のものであろう。ここには程度の差があるのである。

そして勿論人は，次のようにも言う。「私はこの語で半ば彼の事を考えていた。」

678. この (痛みを，或るいは，ピアノの調律の音を) 意味するという事は，

何において成り立っている（worin besteht）のか？［これに対しては,］答えは存在しない。——何故なら，一見して我々に思い浮かぶ答えは，みな役に立たないから。——「しかしそれでも私は，その時，一方を意味し他方を意味してはいなかった。」［と言われよう。勿論,］その通りである。——［しかし］ここにおいて君は，ただ誰も反対しなかった或る命題を強調して繰り返しただけ，なのである。［666を見よ。］

679.「しかし私［原文では「彼」］は，これを意味していた，という事を疑い得るか？」——疑い得ない。しかし君［原文では「私」］は，その事を知っている，という事に確信があるわけでもない。［「知っている」と言えるためには証拠が必要であるのに，今の場合，証拠と言えるようなものが存在しない，という事であろう。］

680. もし君が私に，君が罵倒の言葉を発した時，君は［その対象として］Nを意味していた，と言うならば，その時は，その際君が彼の像を見つめていたかどうか，君が彼を念頭に思い浮かべていたかどうか，君が彼の名前を口にしていたかどうか，等々，といった事は，私にとってどうでもよい事である。君が罵倒の言葉を発した時，君は［その対象として］Nを意味していた，という事実から得られるところの，私に興味のある帰結は，その際君が彼の像を見つめていたかどうか，君が彼を念頭に思い浮かべていたかどうか，君が彼の名前を口にしていたかどうか，等々，といった事とは，何の関係もない。しかし他方，ある人が私に，罵倒は［その対象の］人を明確に思い浮かべる時，或るいは，その人の名前を大声で叫ぶ時，にのみ有効である，と説明するかもしれない。しかし人は，「問題は，罵倒する人がその対象の人を如何に意味しているか，である。」などとは言わないであろう。［その様なことは，問題にならない。］

681. 人は勿論，「君は，君は彼を罵倒した，という事，［そしてまた，その罵倒と］彼との結合は確立されていた，という事，これらの事に確信があるのか？」などとも問わないであろう。

かくして，人がこの結合にそれほどの確信があり得るのであるならば——［そして,］その結合が的外れになる事はない，という事を知り得

るのであるならば――確かにその結合はいとも容易に確立されるに違いない?!　[しかし，実はその結合は「確立（herstellen）される」といったものではない。その結合は文法的関係なのである。だからこそ?!なのであろう。]――さて［しかし］，私が或る人に手紙を書こうと思っていて，実際には別の人に書いてしまう，という事は［万が一にも］生じ得るのか？［普通は，生じ得ない。］そしてそれは［，もし生じ得るとすれば，］如何にして生じ得るのか。［間違って，別の人の名前を書いてしまう，といった場合であろう。］

682.「君は，「それは間もなく止むでしょう。」と言った。――［しからば］君は［「それ」でもって］，ピアノの調律の音を思っていたのか，それとも，君の痛みを思っていたのか？」さて，もし君［原文では「彼」である。しかしここでは，状況を666に合わせて，「君」にしておく。以下も同じ。］が「私はピアノの調律の音を思っていた。」と答えるとすれば――君は，［「それ」とピアノの調律の音との間には］結合が存在していた，という事を確かめているのか？それともその結合を，「私はピアノの調律の音を思っていた。」と答える事によって，作り上げているのか？［どちらでもない。］――君はその両方ともを言うことが出来ないのか？［出来ない。］もし君の言ったことが正しかったならば，その結合は存在しなかったのか？［存在していた。］――そして君は，存在しなかった結合を，それでもなお，作り上げているのではないのか？［違う。その結合は，既に存在していたのである。既に文法的に存在していたのである。］

683. 私が或る肖像画を描いた。［そこで］君が質問する：「この絵は誰を表現しているのですか？」――私は答える：「これはNを表現しているのです。」――君は言う：「しかし，これはNの様には見えない。むしろ，Mの様に見える。」――私が，「これはNを表現しているのです。」と言ったとき，――私は［その絵とNの間に］或る関係を作ったのであろうか？［違う。その絵とNの間には，その絵を描いているときから既に，これはNを表現している，という関係があるのである。］或るいは，［その絵とNの間に存在する］或る関係を記述したのであろうか？［そうである。］［しからば，後者の場合には，］一体，如何なる関係が存在

したのか？［既に述べたように，これはNを表現している，という関係が存在するのである。この点をより詳しく展開すると，次の684になる。］

684. ［「これはNを表現しているのです。」という］私の言葉は，存在する或る関係を記述している，という事に対しては，何と言うべきなのか？　さよう，私の言葉は，それによって初めて現われるわけではない多くの事に，関係している。例えばそれは，当時私は，もし質問されたならば，或る一定の答えを与えたであろう，という事を言っているのである。そして，たとえこれは単なる条件文であるとしても，それでもなおそれは，過去について何事かを言っているのである。

685.「Aを探せ。」は「Bを探せ。」を意味しない。しかし私は，これら2つの命令に従う際，［例えば，AとBが実は同一人物であるならば，］全く同じ事をするかもしれない。

その際，何か違った事が起こらなくてはならない，と言うことは，「今日は私の誕生日である。」という命題と「4月26日は私の誕生日である。」という命題は，意味が違うのであるから，違った日に係わるのでなくてはならない，と言うのと似ていよう。［意味する，という事は出来事ではないのであるから，2つの命令が違った事を意味するからと言って，直ちに，何か違った事が起こらなくてはならない，という事にはならないのである。ちなみに，4月26日はウィトゲンシュタインの誕生日である。］

686.「勿論私は，［「彼」でもって］Bを意味していた；私は，Aについては，全く考えていなかった。」

「私は……の為に，Bが私の所に来ることを欲していた。」――かく言うことの全体は，［言語ゲームにおける］より大きな文脈を予示している。［意味は，そこにおいて示されるのである。］

687. 勿論人は，「私は彼を意味していた。」の代わりに，しばしば「私は彼について考えていた。」と言うことが出来る。そしてまた，しばしば「そうだ，我々は彼について語っていたのだ。」とも言うことも出来る。そこで自問せよ。「彼について語る」という事は何において成り立って

いる（worin besteht）のか，と。[これに対しては，答えは存在しない。666と678を参照せよ。]

688. 人は，状況次第では，「私は，[その] 話をしているとき，私はそれを君に話しているのだ，と感じた。」と言うことが出来る。しかし私は，何れにせよ君と話をしているとき，その様なことを言いはしないであろう。[687における「彼について語る」という事は，「感じ」において成り立っているのではない。]

689.「私はNについて考えている。」「私はNについて語っている。」
[しからば,]私は彼について如何に語っているのか？　私は例えば「今日私はNを訪ねなくてはならない。」と言う。——しかし，これでは未だ十分ではない。私はなお，「N」でもって，「N」という名前を持つ多くの人を意味することが出来るであろう。——「それ故，私の語りとNの間には，なお或る別の結合がなくてはならない。何故なら，さもないと私は，なお彼を意味しないであろうから。」
確かに，その様な結合は存在する。ただしそれは，君が想像する様なものではない。即ちそれは，或る精神的機構によってのものではないのである。[「彼について語る」という事は，「精神的機構」において成り立っているのでもない。]
（人は，「彼を意味する」を「彼に照準を当てる」と比較する。）

690. もし私が，或る時は，或る見かけ上は無邪気な所見を披露して，秘かに横目で或る人を見，また或る時は，目を伏せながら，そこに居合わせる或る人について，その人の名前を口にして語るとすれば，どうであろう？——私は，彼の名前を用いるとき，実際にことさら彼について考えているのであろうか？[そうではない。]

691. もし私がNの顔を記憶に基づいて描くとき，それでも人は，私はその絵で彼を意味している，と言うことが出来る。しかし私は，その絵を描いている間（或るいは，その前後）に生じた如何なる事象[(例えば，彼の顔の思い出し)]について，それが[彼を]意味しているという事である，と言えるのか？[言えない。]何故なら，人は当然，私[原文で

は「彼」] が彼を意味しているとき，私は彼に照準を当てている，と言うであろうが，しかし，彼の顔を思い出すとき，私は如何にして彼に照準を当てることが出来るのか？ [原文では，改行あり。]

私の言わんとすることは，こうである：人は如何にして [他ならぬ] 彼を思い出すのか？ [人は，如何なる事象とも関係無しに，当に他ならぬ彼を思い出すのである。]

[即ち，] 人は如何にして [他ならぬ] 彼を [記憶に] 呼び出すのか？ [人は，如何なる事象とも関係無しに，当に他ならぬ彼を記憶に呼び出すのである。]

692. 或る人が「私が君にこの規則を与えたとき，私は，君はこの場合には……でなくてはならない，という事を意味していた。」と言うならば，それは正しいであろうか？ たとえ彼が，その規則を与えたとき，その場合については全く考えていなかったとしても，である。勿論，それは正しい。「それを意味する」という事は，それについて考える，という事を，全く意味してはいないのである [から]。しかし今や問題は，如何にして我々は，彼がこの事を意味していたと判断すべきか，である。—— [これに対する答えは，こうである。] 彼は，例えば，算術と代数の或る一定の技術をマスターしており，そして，他人に数列の展開に関する通常の教育を与えていた，という事 [があるとすれば，この事] は，その様な [判断の] 規準である。

693. [君が]「私が或る人に数列……の構成を教えるとき，私は勿論，彼は100番目の項には……と書かなくてはならない，という事を意味している。」[と言うとき，それは] ——全く正しい。君は，その事を意味しているのである。しかも勿論，ほんのちょっとでもその事について必ず考える，という事なしに，である。この事は君に，動詞「意味している」の文法が動詞「考える」の文法と如何に違っているかを，示している。そして——もし人が混乱を作り出す事を目指すのでないならば——意味しているという事は一つの精神活動である，と言うよりも間違った事はないのである。(バターの値段が上がるとき，人はこの事をバターの活動として語る事も出来よう。そして，それによって何らの問題も生じないならば，そうする事は無害である。)